

札幌市社会教育委員会議 議論の記録(令和5年度)

令和6年(2024年)3月

札幌市社会教育委員会議

会議経過

- ▶第1回会議（令和5年8月22日）
 - （報告事項）・第3次札幌市生涯学習推進構想について
 - ・地域学校協働活動推進事業について
 - （協議事項）・社会教育委員会議の進め方について
 - ・社会教育委員会議の協議テーマについて・・・・・・・・・・ 1

- ▶第2回会議（令和5年11月21日）
 - （報告事項）・野外教育総合推進事業について
 - （協議事項）・協議テーマ「子どもの体験活動の推進について」・・・・・・・・ 4

- ▶第3回会議（令和6年1月17日）
 - （報告事項）・第3次生涯学習推進構想の令和4年度実施状況について
 - （協議事項）・協議テーマ「子どもの体験活動の推進について②」・・・・・・・・ 5

- ▶第4回会議（令和6年3月5日）
 - （報告事項）・令和6年度札幌市教育費予算について
 - ・地域学校協働活動推進事業
 - 令和5年度実施状況及び令和6年度実施方針について
 - （協議事項）・協議テーマ「子どもの体験活動の推進について③」・・・・・・・・ 6

社会教育委員会議の協議テーマについて

令和5年8月22日

令和5年度協議テーマ案 「子どもの体験活動の推進について」

背景

(文部科学省 R4年12月「子供の体験活動推進に関する実務者会議論点のまとめ」より)

- 少子化や子どもの生活の多様化、家庭環境の変化等により、子どもたちの**体験活動の場や機会は減少傾向**にある
- 新型コロナウイルス感染拡大により、子どもの**体験活動の減少に拍車**がかかっている

体験活動の定義

(H19中教審答申)

- 体験活動とは
「**体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験するものに対して意図的・計画的に提供される体験**」

(H25年中教審答申)

- 具体的には
「**生活・文化体験活動**」…放課後に行われる遊びやお手伝い、野遊び、スポーツ、部活動、地域や学校における年中行事等
「**自然体験活動**」…登山やキャンプ、ハイキング等といった野外活動、又は星空観察や動植物観察といった自然・環境に係る学習活動等
「**社会体験活動**」…ボランティア活動や職場体験活動、インターンシップ等

体験活動の効果

(独立行政法人国立青少年教育振興機構 R3年 「青少年の体験活動等に関する意識調査報告書」)

子供のころに家庭や青少年教育施設等で**自然体験活動を多く行った者ほど、自己肯定感、自律性、協調性や積極性といった非認知能力が高くなる傾向**がみられる

(独立行政法人国立青少年教育振興機構 平成23年 「リフレッシュ・キャンプ」参加者アンケート調査報告書)

体験活動に参加する前後の子供の意識等について調べた調査において、**体験活動に参加した後は、その前と比べて、物事に対する意欲の向上**がみられた

◆体験活動による**自己肯定感、自律性、協調性、積極性**といった非認知能力の育成は重要

◆変化の激しい多様な時代に生きる次世代の子どもたちの育成にも繋がる
(次期札幌市まちづくり戦略ビジョンが目指す「生涯現役で活躍できる人」)

- 体験活動については、学校教育法、社会教育法、いじめ防止対策推進法等にその促進等について記載されているとともに、現行の学習指導要領(平成29年3月)においても、体験活動等を通じて、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めることとされている。
- 少子化や子供たちの生活の多様化、家庭環境の変化等により、子供の体験活動の場や機会は減少傾向にある。また、新型コロナウイルス感染拡大により、人との密集や接触を伴う集団の体験活動は敬遠され子どもの体験活動の減少に拍車がかかっている。
- 変化の激しい多様な時代に生きる次世代の子どもたちの育成にあたっては、体験活動による自己肯定感、自律性、協調性、積極性といった非認知能力の育成への取組は必須であることから令和5年度協議にあたっては「子どもの体験活動の推進」を協議テーマとして取扱いたい旨を事務局より提案した。

➤テーマの設定等について各委員の主な意見については、次のとおり。

【白井委員】

- ・子どもの体験活動の推進ということで、大変有意義な協議性のあるテーマ設定だと思う。
- ・資料では小学校や幼児が主な対象のように感じられるが、対象とする子どもの範囲をどの辺まで考えるのかが一つの大きな視点だと考える。
- ・社会体験活動としてボランティア活動、職場体験活動、インターンシップ等と書いてあるが、例としてはあまりその部分が入っていない。自然体験活動の方に寄っているという印象を受けている。
- ・どこまでを子どもの範囲とするのか。そして、社会体験などをどの辺まで考えるかということが、ちょっと議論の幅広さに影響すると感じた。

【片岡委員】

- ・地球温暖化ということもあるので、自然の中で学ぶということは体験とともに、現在地球が置かれている状況について学ぶことになると考えている。
- ・「第3次札幌市生涯学習推進構想」の中であった図書館の活用の話と結びつけて考えたいと思っている。アメリカのインディアナ州の市は図書館が子どもたちの学習のハブみたいな役割を担っている。図書館は学びの知の集合体である。本を読むことは非常に大事で、今は、AIやChatGPTが闊歩する時代ではあるが、自分の頭で考え、生涯、本を読み続けることは学生にとって、非常に大事だと思っている。ですから、一つのところ（図書館）を拠点にして他の施設や事業と連携して、より深く学べる、土台ができるのではないかと考えた。

【松岡委員】

- ・例を見てみるとイメージとしては体験活動というとキャンプ、自然とかそういう体験の方が出がちだが、例えば、本物に触れる体験活動という意味では、博物館や美術館に来る子どもたちを見ていると、本物の彫刻に触れる、本物の絵画を見するという、学校で美術の教科書を見るのとはちがう一つの大きな体験、感動を呼ぶ体験になっていると思うので、本物というものに触れる体験も併せて考えていきたい。

【今泉委員】

- ・このような子どもの体験活動の推進というのは非常に大事だと思っている中で、林間学校の事業や、冬の自然体験施設での事業に参加できるお子さんのご家庭と、まったく参加できないご家庭のお子さんというのも非常に多くいるんだろうなと、普段のかかわりから見て思っている。
- ・このような事業に、積極的に「参加できます」と行けるお子さんのみならず、そうじゃない、なかなか参加しにくい、例えば不登校であったり、一人親世帯で心身ともに余裕がない、社会の中で孤立しがちな状況にいるようなご家庭やお子さんに対するアプローチというところも含めて、体験活動の推進というところで考えられたらすごくいいなと思っている。

【榊委員】

- ・今年（2023年）の4月1日に施行された「こども基本法」の中に「自己に関係する事項に関して意見を表明する機会の確保」というところがあり、やはり（子どもから）意見を聞く場をもつ、という視点をもっていたきたい。
- ・また、本当に余裕のない世帯があって、子どもの貧困問題は、子ども自身の「得られるはずの体験の格差」問題でもあるので、そこをどう埋めて行くのか、もう一步深めて、「すべての子どもがこのような体験をできるような仕組み」をどう作っていくのか議論のポイントだなと思っている。

【安田委員】

- ・以前に親子の参加で農家体験をした。一人で出てくるのが苦手な子というのはたくさんいて、親を通しての人のかわりがない子どもは、人見知りが多く、一人で出てくるのが苦手な子が多いので、親子体験というのはとてもよかった。
- ・あとはただ行っただけ、1回きりの思い出にしないためにも、収穫から袋詰めまでの、育っていく過程や経済活動みたいなものを目の当たりにすることが、一番体験活動の効果としてあるのではないかと感じている。

【中野委員】

- ・コロナ禍でいろいろなものが大きく変わったと思う。我々大人がやる会議にしても対面で参加していたものが全部ズームになったりオンラインになったりした。それを子どもに置き換えると、子どももデジタル端末を一人1台持ってきて、いろんなものを、体験ではなくて画面上で疑似体験するという機会が一気に増えた気がする。コロナの3・4年間で徹底的に子どもたちの体験活動が減ったなと感じている。
- ・今後の課題として「本物を見せる」「体験させる」機会を復活させてほしいという思いでいる。現地に行った時のにおいとか風とか気温とかも含めて子どもたちの体験だと思う。

【出口議長】

- ・コロナ禍においてこの3年間、体験活動がほとんどできていない。大学で学生と接していてコミュニケーションをとれない学生が多いと感じている。この体験活動に視点を当てたテーマということの重要さというのを改めて感じている。
- ・参加できる家庭、参加できない家庭があるからこそ、地域学校協働活動などで、参加しやすい環境をどうつくっていくのか考え、それをつくっていくのも大事なこと。
- ・自然体験活動をするにあたって、親が行きなさいよとか、一緒に行こうよとか行動を起こさないと、なかなかこの自然体験活動が生活体験などにはつながっていかないと思った。子ども以前に大人に大事だとむしろ思っていて、大人が興味をもたないと、その子どもたちの体験機会は提供されないという、そんな関係性があるからこそ、子どもたちだけでも参加できる環境を、どのようにつくっていくのかということを議論していきたいと考えている。
- ・いろいろな体験をするというのは大事なことだし、また、たくさん経験をして失敗をして失敗をもとにして次つながったときにどうするかってことを考えるのはとても大事なことだと思う。そんな事柄についてこれから皆さん方とぜひ、いろんなご意見を踏まえながら進めていきたいと思いますので、今期につきましては子どもたちの体験活動の推進について皆様方と協議をしていきたいという風に考えています。

➤協議にあたっては、文部科学省が令和4年12月に公表した「企業等と連携した子どものリアルな体験活動の推進について～子供の体験活動推進に関する実務者会議論点のまとめ～」を踏まえ

①体験活動の「量」の確保

②体験活動の「質」の確保

③体験活動の教育的価値の啓発

以上の3項目について、各会議で協議していくこととした。

子どもの体験活動の推進について①

令和5年11月21日

- ▶ 第2回会議では、「子どもの体験活動の推進」について、実際の議論に移る前に具体的な体験活動のイメージを全体で共有するため、長沼町の廃校跡を利用して令和5年4月に開校した「まおい学びのさと小学校」の動画視聴を行った。
- ▶ その上で、「**体験活動の充実を図るための具体策**」をテーマに、学校、家庭、地域という視点で2グループに分かれて議論を行った。
- ▶ 議論の概要は次のとおり。

【アイデア】

●学校でできること

- ・学校施設の開放
- ・地域活動等の情報発信

●家庭でできること

- ・体験の入口として家族単位の登山やキャンプなど
- ・子ども食堂での料理体験を家庭で実践すること

●地域でできること

- ・子どもたちがイベントを企画実施できるような活動
- ・お年寄りによる伝承遊び
- ・地域人材とのつながりを強めること
- ・地域で活動する人達のネットワーク構築

【アイデア実現にあたって必要な視点・具体策】

★異学年・異年齢や初めて会う人たちとの交流

→地域の学校や公民館、児童会館、空き家などを活用して子どもや地域の人が集まって色々な体験活動ができる居場所をつくる。

★子どもが体験活動に参加するかどうかは親の関心度も関わってくることから、親への意識づけをどのように行うのか

→体験活動のメニューとして食の要素を取り入れ親の関心を引く。

★成功体験、失敗体験の積み重ねの中でどのように体験していくのか、その後に何が得られるのか、それらをどう循環させていくか

→学生やおやじの会主催の野外キャンプなど。
→活動場所として児童会館等の活用や著名人を招いた魅力あるプログラムの開発。

★プログラムの実施に必要な費用のみならず、経済的な事情を抱えた家庭への財政的な支援

★プログラムの実施を一過性のものではなく、持続可能なものにしていくためには人材育成が大切（地域づくりにも繋がること）

→おやじの会やPTAの活用。

●経済対策

- ・経済的な事情で活動に参加できない人への費用の補助
- ・家庭の事情（一人親、休みが取れないなど）で活動に参加できない人向けのプログラムの開発。

●人材育成

- ・民間企業やクラブチームとの連携
- ・高校生や大学生、ジュニアリーダーの活用
- ・児童会館やミニ児に配置された子どもコーディネーターを通じた地域人材と子どもの繋がりづくり
- ・CSをきっかけとした学校区と地域の繋がりづくり
- ・子どもを活動に参加させるために親や地域の人への働きかけ



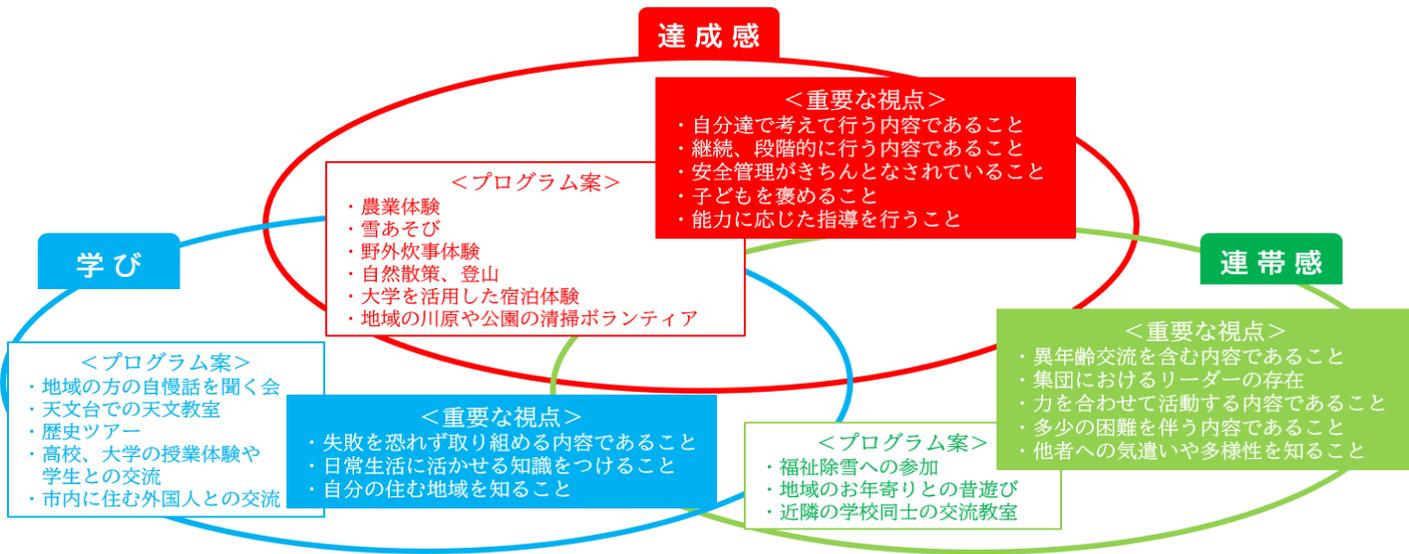
子どもの体験活動の推進について②

令和6年1月17日

➤第3回会議では、「**体験活動の質の向上を図るために**」をテーマに、前半で達成感、学び、連帯感を感じられるプログラム案やそれらの実施にあたり重要な視点について議論し、後半では指導者に必要とされる要素や行政の役割について2グループに分かれて議論を行った。

➤議論の概要は次のとおり。

【達成感、学び、連帯感を感じられるプログラム案および実施にあたり重要な視点】



【行政の役割】

- ・場の確保（休日の児童会館の活用など）
- ・事業の広報
- ・地域差の解消
- ・予算の補助
- ・地域人材の把握
- ・企業との連携
- ・指導者等の手配
- ・ニーズとシーズのコーディネート
- ・事故発生時の責任体制の整理

【指導者に必要とされる要素】

- ・子どもの自主性を尊重し、必要以上に教えずらないこと
- ・体験に応じた専門性を備えていること（ホンモノを伝えられる人材）
- ・子どもたち一人一人の特性に応じた対応ができること
- ・集団を束ねる力が備わっていること
- ・危機管理能力を有していること
- ・失敗からも学ばせる指導ができること
- ・子どもと一緒に楽しむことができること
- ・物事を伝える力を備えていること
- ・コーディネートする力が備わっていること



子どもの体験活動の推進について③

令和6年3月5日

▶第4回会議では、「**体験活動の教育的価値の啓発を図るために**」をテーマに、保護者や子どもたちに体験活動への興味関心に働きかける「**きっかけづくり**」、興味関心に働きかけたうえで必要な情報を届ける「**仕組みづくり**」、興味関心をさらに深める「**仕掛けづくり**」について議論を行った。議論の概要は次のとおり。

●保護者や子どもたちに体験活動への興味関心に働きかけるきっかけづくり

- ・キッズニアのような形で多様な自然体験ができる機会
- ・保護者の職場を子どもたちが見学する機会
- ・放課後に短時間かつ無料でできる体験活動の機会（ちょこっと体験会）
- ・市有施設や学校等を活用した遊び（かくれんぼや鬼ごっこ等）の機会
- ・アニメや漫画等を入口とした事業の実施
- ・街の中心部や繁華街等の人目につきやすいところにちょっとした体験の場（焚火等）を設ける
- ・体験活動を楽しんでいる人の話を聞く機会
- ・大人が体験活動の良さを分かっていないと子どもの体験に繋がらない。まずは大人（親）の興味が湧く取組が必要

●興味関心に働きかけたうえで必要な情報を届ける仕組みづくり

- ・身近な公園や各区PTAで行われている事業のさらなる周知
- ・HPやSNSを活用した広報
- ・事業の情報や口コミ、活動場所の情報等を集約したサイトの構築
- ・学校・保護者間連絡システム（すぐーる）を活用した事業周知
- ・一人親家庭と繋がりをもっている支援団体等との連携

●興味関心をさらに深める仕掛けづくり

- ・体験活動の共同開催（「体験の日」の設置）
- ・体験活動アドバイザーの設置
- ・スタンプカードなどを作成して活動の達成度や習熟度を測ることでさらなる意欲向上に繋げる

⇒きっかけづくりにおいては、**子どもや保護者が何に関心があるのかを把握**する必要があり、**ニーズに応じて様々な選択**ができることが重要。また、自然体験においては、**初心者向けにハードルをなるべく下げた内容**を提供して、少しずつ積み上げていくような試みも重要

⇒仕組みづくりにおいては、本市や各団体が行っている事業があまり知られていない状況があることも考慮し、事業の情報を**集約・発信するサイト**の構築なども検討する必要がある。また、一人親家庭への広報にあたっては、既にそういった家庭と繋がっている**支援団体等と連携**することも効果的。

⇒仕掛けづくりにおいては、興味関心がさらに深まるよう**専門家（アドバイザー等）を設置**するほか、**活動が将来のインセンティブとなるような工夫**も重要。



今年度の議論を通じて

▶第4回会議では、協議テーマに関する最後の会議の場であったことから、総括的な意見・感想について各委員からご発言いただいた。各委員からの主な発言は次のとおり。

【安田委員】

- ・私の子ども時代は、当たり前前に家族でキャンプに行ったり、地域の方が体験活動を催してくれていたと感じる。今年度の会議を通じて体験教育というものがどれほど大事なものが再認識することができた。

【臼井委員】

- ・自身の体験がさまざまな生きていく力を強めていって、それが最終的には学校教育と連動してさらに高まっていくものと思っている。社会教育と学校教育、あるいは体験と学習というものをあまり区別せず、人間をつくる意味では相互に連動した活動であるという視点が大切なのではないかと感じた。

【小田島委員】

- ・学校関係者以外の方の色々なお話を聞くことができ大変有意義な会議だったと感じた。今後学校が関わっていくこと、学校が担わなければならないことを再認識することができたと思っている。学校現場では、自然体験に関わらず、文化的な体験も時間や予算等の関係で減ってきており、これらに関しても改めて考えていかなければならないと感じた。

【松岡委員】

- ・色々な事情で学校や地域でホンモノに触れる体験の機会が少ないと感じているが、かつては学校現場にいて、現在は芸術の森美術館や国際芸術祭などで解説のボランティアをしている身からすると、こうした機会が子どもの成長にとってやはり大切であるということを会議に出席して感じた。

【小野寺委員】

- ・体験活動の推進にあたっては、学校教育と社会教育の両輪で進めていくことが大切であり、いずれにしても主人公は子どもであること強く実感した。子どもたちのためにこのような場で時間を作って話し合うこと自体が貴重であり、未来を生きる子どもたちのために自分に何ができるのかということを改めて考えながら今後も活動していきたいと感じた。

【中野委員】

- ・PTAにおいても色々な課題等を抱える中で悩むこともあったが、こういった会議の場でPTAの話題も挙げていただき少し勇気もらった。まだまだできることがあるということ、それから現在実施していることをしっかりと継続していこうという気持ちにさせていただいた。

【榊委員】

- ・社会教育において重要なこととしては、大人も子どもも豊かに生きていくためにどのようなことを考えて実行していくのかだと考える。色々な体験を通じ共感してつながっていく、その「つながりづくり」をどう構築していくのかを考えてきた。より人間らしく生きるための道筋を今後も一緒に考えていきたいと思う。

【今泉委員】

- ・ 普段の仕事の中では虐待やDVに関係する家庭に接する機会が多いが、そういった方たちが自分達の知らない文化や体験に触れる機会はとても少ないと感じている。自分達のことでも精一杯で中々一歩を踏み出せず、大人になっていく中で苦しい期間が長く続いている方達も多くみているなかで、知らない文化や体験に触れる機会をどう作るか、そうした機会の中で居場所であったり、自分らしく生きるきっかけづくりの1つとなれば良いと思いながら参加させていただいた。

【片岡副議長】

- ・ 私の専門は教育学なのだが、物事を考える際に歴史の流れで考えるということをしている。例えば、戦後公選初の市長となった高田市長が戦後の立て直しの時期に、現在では日本で公設の児童館としては最も古い中島児童会館を作った時の経緯を調べたことがあり、高田市長自身が学校現場の出身でもあったことから、教育に力を注いだ歴史があった。学校教育も社会教育においても色々と課題が多い中、それらを前へと進めるためにも、重要なことは学校・家庭・地域が一丸となって手を取り合っていくということに尽きると感じている。本会議は、札幌に生まれ、札幌で育って良かったと思えるように、行政のみならず全市一体となって考える良い契機となったと考えている。今後も私の立場で何かできることがあれば良いと考えている。

【出口議長】

- ・ 先日念願だったシマエナガに会うことができ、それ以来野鳥に対し一層興味が湧いているが、やはり写真ではなく実物を見ることでさらに可愛さを感じられるといったこともある。その他、冬山登山では何が楽しいのかと聞かれることもよくあるが、頂上に登ったときに見られる景色などは何ものにも代えがたいものがある。そういった意味では本物に触れることの良さというものは体験した人にしか分からないものだと思う。やったこともないのにできないと言う子どもや大人が多いと感じるが、できるかできないかは別としてまずはやってみることが大切で、そんな気持ちを子どもたちにもっていただきたいと思う。そのような気持ちを育むためにも自然体験をはじめ、職業体験など様々な体験の場を充実させていくことが重要であると会議を通じて改めて認識した。

社会教育委員会 委員名簿

(任期 令和5年7月1日～令和7年6月30日)

	氏名	区分	所属団体等
議長	出口 寿久	学識経験者	北海道科学大学 全学共通教育部 教授
副議長	片岡 徹	〃	北星学園大学 文学部 心理・応用コミュニケーション学科 教授
委員	小田島 潔恵	学校教育関係者	札幌市中学校長会 (札幌市立陵陽中学校 校長)
	小野寺 拓	社会教育関係者	公募委員
	中野 吉朗	〃	札幌市PTA協議会 会長
	松岡 洋一	〃	公募委員
	今泉 明子	家庭教育関係者	社会福祉法人常徳会興正子ども家庭支援センター 副センター長
	安田 香織	〃	NPO法人 子どもの未来・にじ色プレイス 代表理事
	臼井 栄三	学識経験者	北海道教育大学 岩見沢校 非常勤講師
	榑 ひとみ	〃	札幌学院大学 人文学部こども発達学科 准教授

札幌市社会教育委員会議議論の記録（令和5年度）

令和6年（2024年）3月

編集・発行：札幌市教育委員会生涯学習推進課

市政等資料番号：01-S01-23-2813

〒060-0002 札幌市中央区北2条西2丁目 STV北2条ビル4F

TEL (011) 211-3872 FAX (011) 211-3873